



▲大理石の工芸品展示会場

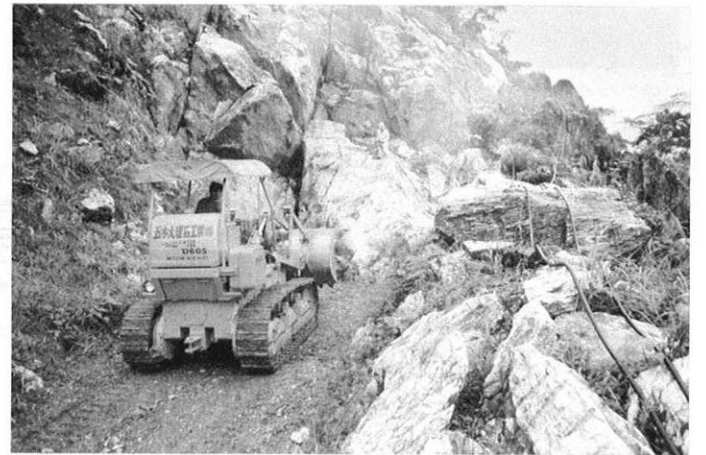
くくまもとの特産

人気集める 五木大理石

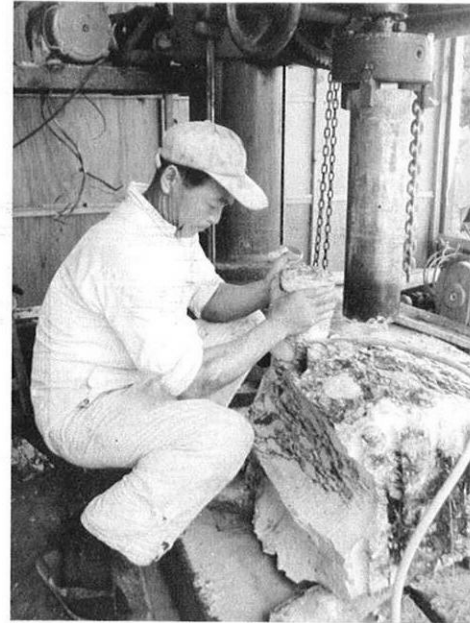
石ブームで愛石家の人気を集めている五木の大理石は五木村の山々でとれる。大理石の本場であるイタリア産と同じ古生層で、石質もすぐれているという折紙つき。

最近では、建築材としても利用が活発で、すでに熊本県庁舎にも五木大理石が出荷された。建築材を造った残りの廃材を利用して工芸品も生産しているが、独特の美しい色彩（黒・旭光・ダークグリーン・紅葉石）はイタリア大理石の工芸品を上回るという評価である。

現在、五木の大理石の埋蔵量は8千万トンと推定されているが、各種工芸品、民芸品、建築用材と、その加工技術の進歩とともに、ユニークな郷土の特産として脚光を浴びつつある。



▲五木村頭地付近の原石採取場で…原石があちこちに顔を出している。

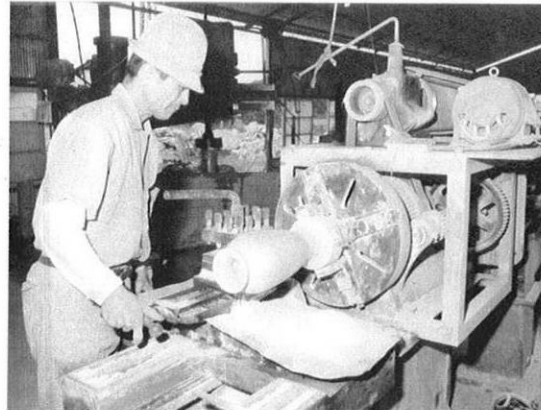


▲強じんな原石は、ダイヤモンドのこで、適当な大きさに切断される。



▲仕上げの段階…サウンドペーパーで研磨され、大理石の肌として光沢をそえてくる。

▼切断された原形の大理石は、旋盤にかけられ工芸品の形へと加工されていく。



ここに人あり▼ 炎と土と執念

★八代市上方町
酒井 正枝さん

初冬の陽だまりの中で晩白柚（ばんぺいゆ）の浅黄色が美しい。スケッチの筆を走らせる酒井さんの表情が一瞬きびしくなる。抜けるような空を切って伸びる赤練瓦の煙突に、八代窯という字が印象的。作業場は、国道三号線沿いの田園の中にあり、密柑や桜に囲まれたこの一角は閑静そのもの。アトリエには所せましとばかりに、壺、皿、茶碗、瓶などが置かれていた。「焼きものの魅力は、つまりは偶然性みたいなものだけど、焼き上がった作品の一つ一つが、違った色、形、ツヤになるところに面白さがありますね……」長い歳月、この道ひと筋に歩んできて、今なお窯出しの時の胸のときめきはかくせないという酒井さん。

陶芸へのひたむきな姿勢

酒井正枝さん（四十六）雅女という雅号。高田焼窯元。本渡の高等女学校卒、結婚と同時にご主人と北支那に渡り製塩業を経営。新婚早々の酒井さんは、家業かたわら、五年間の生活の大半を本場の

絵つけ技術修得のために投入した。父山下畔彦さんの血をついだ陶芸への情熱と執念が彼女をそうさせたのだ。言葉の不自由さを克服しながら、支那人の陶芸家は、熱心に教授してくれた。

戦後、日本へ引揚げてからは、八代郡宮原町に窯をおき高田焼きの研究に没頭することになったが、生産性の問題で、燃料の薪から重油への移行で難関にぶつかった。重油では高田焼独特の青磁の肌や色つやがどうしても思うようにならない。そこで又酒井さんは平戸窯六代目陶悦を訪ねて二年間の見習修業、どうにかその技術を修得することができた。ひたむきな姿勢がいつも酒井さんにはあった。

試行錯誤のよろこびも

「陶芸は大へんな重労働ですね。土ねり作業ひとつとっても、粘土のねり具合が作品の仕上りに微妙に影響する。力がいらしますね。窯づめしたら一昼夜は熱のまわりや温度の配慮などで緊張のしずくめ。一時間おきに注油しますが、疲れたら窯の側で寝転んだりしてね。いろいろの辛さがあるわけですが、でもそれをカバーするものがあるのですね。執念みたいなものが……。」執念といえば、昨年秋、酒井さんが阿蘇へ旅行したとき、ふと足もとの黄土を手にしてひらめくものがあった。早速持帰った土の分析を依頼したら、酸化第二鉄分が五〇パーセントだった。試しに焼いてみたらみごとな黄土

色の発色。そこで又いろいろの実験を試みたらその都度面白い効果があつた。現在、酒井さんのユニークな傾向の作品として形づくられてきている「大阿蘇」がそれである。

酒井さんの窯を訪ねる人は多い。銀行マンの陶芸グループ、教師の同好会、いろいろ。しかし酒井さんは「時間が惜しくて、惜しくて仕様がないうです」と口ぐせのようにいつい云ってしまう。竹ペラの先で丹念にけずられ、パターンが展開

され、葉が象眼されて行く。ご主人の吉春さんは日本へ引揚げてからの建築業はやめて、いまは専らクロロ回しに追われている。長女のまり子さんは母親の血を引いてか、展覧会で受賞する程の作品をつくり、酒井さんの作品にない若さと大胆な造型感覚が認められ、母親を喜ばせている。まさしく制作ひとすじに明け暮れる陶芸一家なのである。

酒井さんは、きょうも、乾いた土のカケラと、粘土のあるアトリエで執念の炎を燃やし続けるのである。

